

2021年度

# 愛知の社会科教育

(第53集)

も く じ

I	教育研究愛知県集会	1
1	小学校分科会	
2	中学校分科会	
II	本年度の研究内容	3
1	小学校第6学年における実践例	
2	中学校第3学年公民分野における実践例	

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会社会科部会  
2021年度 教育課程研究委員

◎部長 ○副部長

ブロック推薦

名古屋			尾張			三河		
氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名
◎前野 協太	名古屋	八幡小	早瀬 友浩	尾張旭	西中	池部 弘樹	碧南	東中
○牧原 晃	名古屋	はとり中	伊藤 宏将	海部	弥富北中	○駒野 雅彦	豊田	前林中

第67～70次教育研究全国集会レポート提出者

67次			68次			69次			70次		
氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名
宮下 渉	瀬戸	にじの丘小	甲斐俊晃	名古屋	中小田井小	古居成幸	西尾	八ツ面小	—————	—————	—————
加藤 遊	西春	西春小	松田拓也	豊橋	東陽中	酒井孝康	岡崎	城南小	—————	—————	—————

第71次教育研究全国集会レポート提出者

中西 悠 (岡崎・豊富小)

野口 哲平 (名古屋・志段味中)

## I 教育研究愛知県集会

### 1 小学校分科会

#### (1) 全体の感想

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を解決させたり、現在や未来の社会をとらえさせるための手だてを工夫しながら、よりよい社会を創造する力を育もうとしたりする実践が報告された。討論では、「地域素材を教材化した学習活動の工夫と育てたい力」、「よりよい社会の実現をめざし、主体的に考えるための学習活動の工夫」や「先人の働きや政治の役割を、切実感をもって追究できる学習活動の工夫と育てたい力」などについて、話し合われた。

#### (2) 討論の内容

##### ① 国土・産業学習

工場を見学して、仕事に従事している人と出会う中で、努力や思いに迫る実践や、思考ツールを用いて、考えを整理したり、比較したりしながら話し合う実践などが報告された。討論では、社会科における子どもたちが主体的に考えること的位置づけやゲストティーチャーを取り入れることのよさなどについて話し合われた。助言者からは、思考ツールは子どもたちの考えを表出させるための道具であって、目的をはっきりさせた上で使っていく必要があるとの助言を得た。

##### ② 歴史・公民学習

避難所である学校の現状を知り、よりよくする方法を考えることで、社会を創造する力を育てる実践や、戦時中の地域の様子分かる資料を活用したり、グループでの調べ学習や対話を取り入れたりしながら、切実感をもって、自分の意思を表明する力を育成する実践などが報告された。討論では、政治の役割や先人の働きを、切実感をもって追究させるには、どのような工夫があり、また切実感をもって追究させることで、どのような力を育てていきたいかについて話し合われた。助言者からは、対話の中で、考えのずれに気付かせたり、新たな発見をさせたりしながら、それを自分に落とし込ませていくことで、追究段階での学習が深まるとの助言を得た。

##### ③ 地域学習

消防団の訓練を体験したり話を聞いたりしながら、人々の苦労や思いに迫り、地域への愛着を育み、社会参画する児童の育成をめざした実践や、南海トラフ地震を教材化し、よりよい社会づくりへの参画をめざした実践などが報告された。討論では、地域素材を教材化した学習活動にはどのような工夫があり、それを取り入れることによって、どのようなよさがあるのかについて活発に話し合われた。地域素材を扱うことにより、直接体験ができたり話を聞いたりすることができ、その中で、共感が生まれ、それにかかわる課題について、切実感をもたせられることが確認された。助言者からは、社会科は感動と発見が大切であり、身近な素材をていねいに教材化することで、子どもたちは、自分たちで何とかしなければならないという切実感をもつとの助言を得た。

#### (3) 今後に残された課題

- ① 子どもたちに共感や切実感をもたせるための教材の工夫
- ② 子どもたちが主体的に考えるための学習活動の工夫

## 2 中学校分科会

### (1) 全体の感想

県内十九のレポートが報告され、質疑や討論が活発に展開された。地域ごとに異なるよさや課題をいかし、子どもたちに自分事として考えさせる実践や、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、ゲストティーチャーやICT、思考ツール等を活用しながら学びを深める実践が多く報告された。

### (2) 討論の内容

#### ① 子どもたちが主体的に取り組む学習活動のあり方

子どもが主権者として学ぶ意欲を高めるためには、課題設定の場面で、子どもの知識や経験から教材の出合わせ方を考えることの大切さについて議論された。途中からは、わたしたちにとってあたり前なことでも、実は人によってとらえ方が違い多様な考え方につなげていけるなどという意見が出された。

また、社会参画の意欲を高める学習活動として、未来予測をしながら、自分の生活と結びつけて考えていくことや、多くの資料やゲストティーチャーなど、その道のプロの考え方を参考にしながら、自分なりの考えをもって社会参画できるようにしていくことが大切と確認された。

#### ② 社会に対する見方・考え方を深める学習活動のあり方

「地域素材から社会に対する見方をどう育てるか」についての討論では、子どもたちにとって身近な地域教材をどのように社会全体の問題としてつなげていくかということが話し合われた。地域素材のもつ、子どもたちにとって身近という強みをいかすこと。同時に自分たちの地域の課題に向き合わせることで、切実感をもって課題に向き合うことが大切ということも話し合われた。

また、「対話的な学習活動を通して、社会に対する見方・考え方をどのように深めるか」についての討論では、多面的・多角的な視点をもたせることが議論された。思考ツールを用いて子どもたちがもつ考えの違いを視覚的に交流させることが効果的なのではないかという意見も出た。

#### ③ よりよい社会を創造するために社会科学習はどうあるべきか

本年度は短縮日程で行われたことにより、総括討論は行わなかった。しかし、それまでの参加者による質疑や討論の中で、「よりよい社会を創造するために社会科学習はどうあるべきか」について多く議論される場面があった。

助言者からは、子どもの主体的制を担保するために、身近な魅力ある教材と対話的な活動を結びつけて単元を貫く課題を設定し、子どもたちの社会参画意欲を高めていくことの重要性が指摘された。また、授業をすすめていく中でも子どもの思考の変化に注意し、めざす子どもの姿により近づけるよう、授業を修正していくことも話題になった。

### (3) 今後に残された課題

#### ① 各地域の特徴や実情をふまえた上で、めざす子ども像とそれに迫る単元をどのように設定するか

#### ② 先が分からない時代に、子どもたちが未来を創造することができる社会科学習のあり方

## II 本年度の研究内容

### □ 社会科教育

#### 教育課程編成にあたっての基本的な考え

##### ○「基礎・基本」

必要な語句や表現、技能などは、「どの子にも必要な学力」である。社会科では、資料を読み取り、それらを根拠にして自分の考えをつくり、それらを表現する学習活動を行うことである。

##### ○「生きてはたらく力」

学んだことを日常生活にいかす「活用する学力」である。社会科では、話し合いを通してさまざまな意見にふれ、自他の意見を尊重しながら合意形成をはかる学習活動を通して、自他の意見を尊重する態度を養うことである。

#### 【小学校第6学年における実践例】

社会的事象の見方、考え方を働かせ、地域社会の一員として、  
よりよい社会の実現をめざす児童の育成

～6年社会科「願いを実現する政治」感染症対策から見る政治を通して～

##### 1 主題設定の理由

本単元「願いを実現する政治」は、国や地方公共団体の政治のとりくみをとらえ、国民生活における政治の働きを考えるのに適している。これまでの学習で、日本国憲法や国の政治のしくみについて学んできた。現在、児童の生活に最も身近な問題は、「新型コロナウイルス感染症」(以下コロナ)である。コロナと自分たちの生活の関わりについて考えることで、身近な問題として社会的事象をとらえることができ、主体的に学習に取り組むことができると考える。コロナに対する国や地方公共団体の政策について調べる中で、自分なりの考えをもち、話し合うことで、政治の役割についての理解を深め、自分にできることを考えることで、地域社会の一員として、よりよい社会の実現をめざすことができる児童を育てたい。

##### 2 研究の内容

###### (1) めざす子ども像

上記に示した主題設定の理由をふまえて、めざす子ども像を以下のように設定した。

- ①自分なりの考えをもち、自分事として問題をとらえ、主体的に課題を追及する児童
- ②社会的事象を多面的・多角的にとらえ、考えを深めたり、よりよい社会の実現をめざすことができる児童

###### (2) 研究の仮説と手だて

###### ① 仮説Ⅰ(めざす子ども像①に対して)

「児童にとって最も身近な問題を取り上げた単元構想を行えば、自分事として考えを深められるであろう。」

###### ② 仮説Ⅱ(めざす子ども像②に対して)

「国や地方公共団体の政策について、自分の考えをもち、仲間の考えと比較する場を設定すれば、多面的・多角的に問題をとらえることができるであろう。」

###### 【仮説Ⅰに対する手だて】

###### ア 身近な問題から学習課題を設定し、学習意欲を高める

- ① 自分事として考えを深められるようにするために、身近な問題である「新型コロナウイルス感染症」(以下コロナ)を取り上げ、コロナと自分たちの生活のかかわりについて考える中で、人々の願いや社会の抱える問題点に気づくようにする。

【仮説Ⅱに対する手だて】

ア 国や地方公共団体が行った政策をていねいに調べる

- ① 自分の考えを書く時の参考とするために、政策について詳しく調べる時間を設定する。

イ 考えを交流する場の設定

- ① 政策について自分の考えを発表し合う場を設定することで、自分にはなかった考え方や新たな視点に気づくようにする。

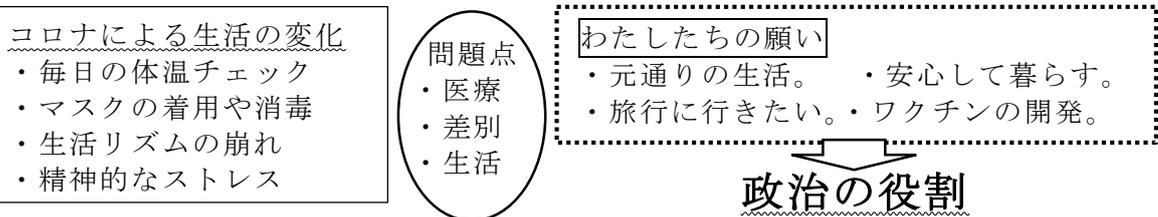
ウ 碧南市と他市の政策の比較

- ② 他市の政策について調べる活動を行うことで、碧南市の政策について多面的・多角的にとらえられるように工夫する。

3 単元の指導計画と抽出児童

(1) 単元構想 (全12時間)

○新型コロナウイルス感染症とわたしたちの生活とのかかわりについて考える。1時間

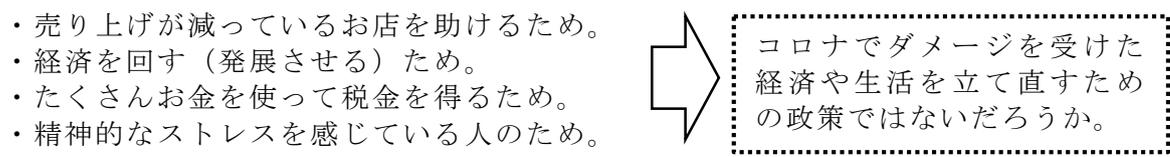


○新型コロナウイルス感染症に対する国や県の対応策について知る。2時間 (調べ学習①)

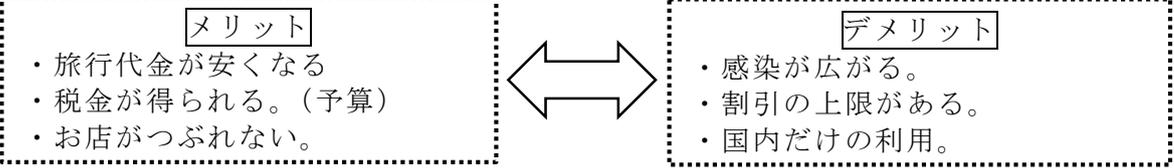


感染症に対する人々の願いは、どのような人たちの、  
どのような働きによって実現されているのでしょうか。

どうしてGo Toキャンペーンをやるのだろうか。

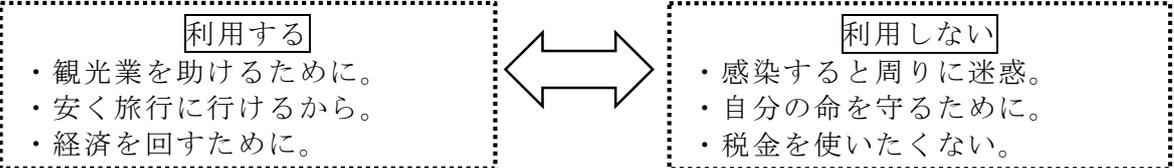


○Go Toトラベルのメリットやデメリットについて考える。1時間



→税金の観点から、補正予算案予算について触れ、予算について知る。

○Go Toトラベルを利用するかどうかについて話し合う。1時間



→経済を回すためには、感染予防を行いながら工夫した政策の実施が必要。

課題をつかむ

考えをもつ・学びを深める

○碧南市のコロナに関する政策や市議会のしくみについて知る。3時間

**碧南市の政策**  
 ・プレミアム付食事券  
 ・水道の基本料金の免除  
 ・特別給付金など



**市議会**→市民の生活の向上をめざし、市民の代表者が話し合い政治を行う。  
 ※議会や市役所のしくみを、国政と比較しながらまとめる。

○碧南市と近隣他市との政策を比べ、地方自治について学ぶ。2時間

**各市の政策の比較**  
 ・同じ政策でも、金額など内容が違っている。

どうして市によって内容が違ふんだろう。

・市の財政力が違う。  
 ・人口（世帯）の数が違う。  
 ・望んでいることが違う。

→地方自治

○第3波が来たら、どのような政策をするか考え、話し合う。2時間

**碧南市の政策**  
 プレミアム付食事券  
 ↓  
 様々な面から、もう一度同じ政策をしたらどのような内容にするか考え、班で話し合う。

安全面  
 ↓  
 願い要望

・プレミアム率  
 ・発行部数  
 ・値段設定

人口  
 ↓  
 予算

**地域社会の一員としての自覚**

生かす

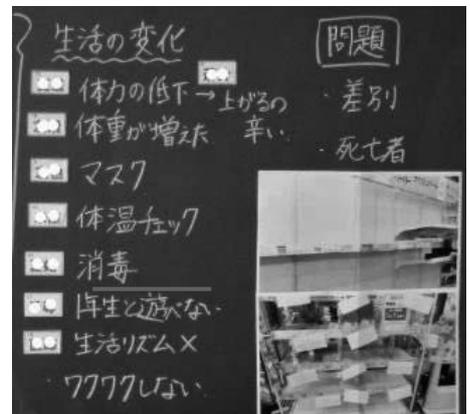
(2) 抽出児童Aの実態と期待する姿

児童Aは、授業中はノートを熱心に取り、テスト前には家庭学習を行うなど努力することができる。事前アンケートでは、「歴史の授業は好き」と回答するなど、前向きな様子もうかがえる。一方で、社会的事象に対して、「なぜだろう」と疑問をもつことはできるが、そこからすすんで調べようとしたり、自分事として考えを深めたりすることは苦手である。本単元で、身近な問題を取り上げることで児童Aの意欲を高め、さまざまな考え方や視点に触れることで、自分事として考えを深めていく楽しさを感じてもらいたい。

4 実践と考察

(1) コロナと生活との関わりについて考える児童A

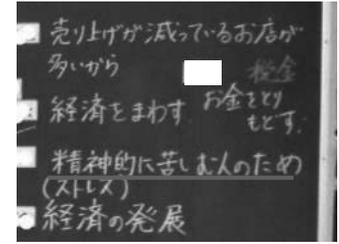
始めに、2020年2月～7月頃までのコロナの状況を振り返った。生活面の変化や問題点について話し合う場面では、マスクや消毒、検温など、主に子どもたちの生活との関わりが深い事柄が挙げられた。児童Aは、例年行っていた1年生との交流行事ができないことを指して「1年生と遊べない」と発言していた。コロナの影響でできなくなっていることを自分の生活と結びつけて考えることができていた(資料1)。後半には、「コロナに対してどのような願いをもっているか」と問いかけた。児童からさまざまな願いが出される中で、GoToキャンペーンが話題に挙げられた。児童Aは、「どうしてあんなことやるの?」と疑問に思っている様子だった。そこで、どうしてそれをやるのか、誰が決めているのかと問うことで、学習課題を設定することができた。



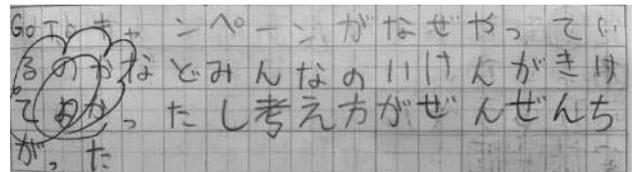
資料1 授業の板書

## (2) G o T o キャンペーンの意義について考える児童A

授業の展開部として、国や県の政策に焦点を当て、「緊急事態宣言」による外出自粛要請や休業要請についておさえながら、G o T o トラベルと比較を行った。「感染を広げないための政策（外出自粛や休業要請）を行っていたのに、どうして感染が広がる恐れのある政策（G o T o トラベル）を国は行うのだろうか」と問いかけた。すると、経済的な視点で政策をとらえている児童が多くいることがわかった（資料2）。児童Aは、「なるほど、そういうことか」と友だちの意見を聞きながらも、「精神的に苦しむ人のため」と、自分の考えを発言することができた。授業の振り返りでは、「G o T o キャンペーンをなぜやっているかなど、みんなの意見がきけてよかった」と、意欲的に授業に取り組み、学びを深めることができていた。



資料2 授業の板書

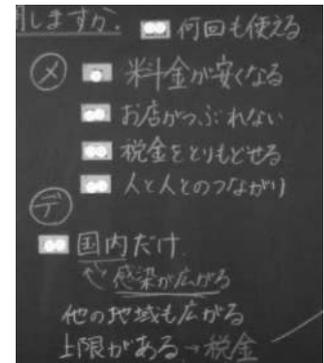


資料3 児童Aの授業の振り返り

(資料3)

## (3) G o T o トラベルのメリットやデメリットについて考える児童A

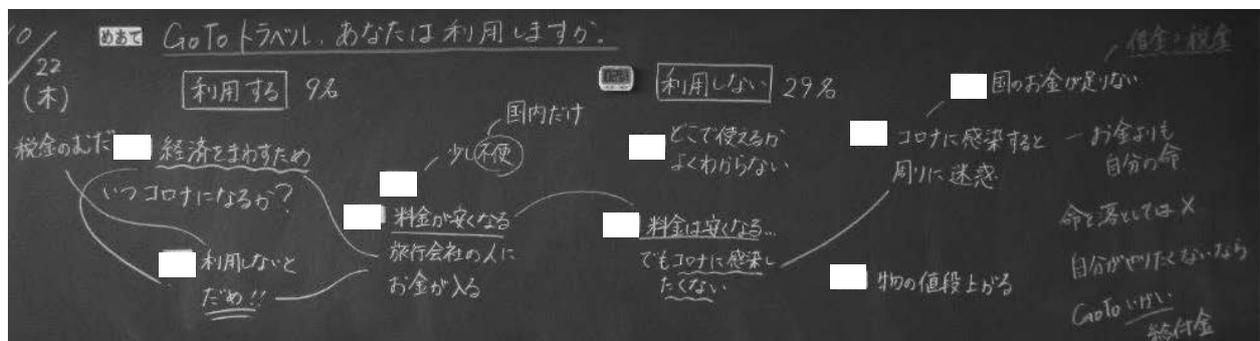
3時間目に「G o T o トラベル」についての調べ学習を行った後、4時間目には児童たちが調べた情報を学級全体で共有し、メリットとデメリットについて考えた(資料4)。メリットとしては、「料金が安くなる」など、料金に関することが挙げられたが、一部の児童は、「お店がつぶれなくて済む」など、経済的な視点から考えを発言していた。デメリットとしては、「感染が広がる」といった安全面に關することから、制限内容があることなど、さまざまな意見が出された。児童Aは、制度の適用が国内旅行だけである点をデメリットとして発言したので、「どうして海外はだめだと思う」と問い返すと、「感染が世界中に広がるから」と理由を答えることができた。



資料4 授業の板書

## (4) G o T o トラベルの利用について考える児童A

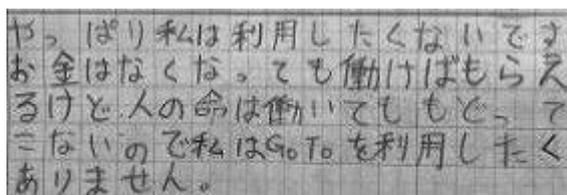
5時間目には、G o T o トラベルを利用するかしないかについて話し合った。資料5のように、利用する側の意見としては、経済的な視点を中心としたものが多く、利用しない側の意見としては、安全面を考慮した考えが出された。



資料5 「G o T o トラベル、あなたは利用しますか」の話し合いをまとめた板書

児童Aは、利用しないと考えている立場であったが、利用すると答えた児童の意見を聞きながら、「確かにそれは困るけど」とつぶやく場面が見られ、自分の考えと友だちの考えを比較しながら話し合いに参加できていることがわかる。話し合いの終盤では、利用しないと答えた児童が多かったので、「自分が払った税金が他の人に使われてしまうけど本当にいいの

か」と問いかけた。すると、「G o T o以外の所で税金が自分のために使われている」、「お金よりも命が大切」と力強く主張をする児童の姿が見られた。児童Aは、「お金はなくなっても働けばもらえるけど、人の命は働いても戻ってこないの、G o T oを利用したくありません」と、自分の考えをさらに深めることができた（資料6）。



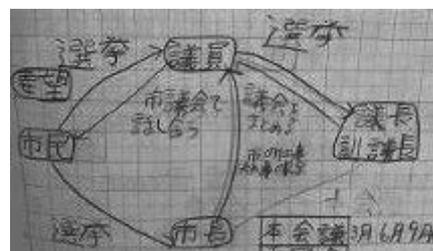
資料6 意見交換会終了後の児童Aの意見

### (5) 碧南市のコロナ対策について知る児童A

6時間目からは自分事として考えられるように、碧南市の2つの政策について取り上げることにした。1つ目は、「飲食店応援プレミアム付食事券」について、2つ目は、「水道基本料金の免除」である。「これらの政策は誰が考えているのか」と問うと、「市役所」という答えが返ってきた。さらに、「これらの政策のためのお金はどこから出ているの」と問うと、「税金」と多くの児童がつぶやいた。そこで、市には予算の使い方を決める組織(市議会)があることを伝え、次の時間には市議会のしくみについて調べることを伝えた。

### (6) 市議会のしくみについて言葉と図でまとめる児童A

1時間の調べ学習を行った後、8時間目には、調べた内容をもとに市議会のしくみについて言葉や図を使ってまとめる活動を行った。児童Aは、調べ学習の内容をもとに、工夫して図にまとめていた（資料7）。まとめの中で、「市長はどうやって選ばれているか」を問うと、「選挙」と答えたので、「内閣総理大臣は国民が選挙で選んでいたかな」と問うと、「違う」と多くの児童がつぶやいた。そこで、国の政治のしくみとの比較を行いながら、似ている所や違うところを考えさせることで、政治のしくみについてより理解できるように工夫した。



資料7 市議会についてまとめた図

### (7) 市の政策の違いに気づき、どうして違いがあるのかを考える児童A

9時間目には、学級を4つのグループに分け、碧南市の近隣である刈谷市、高浜市、西尾市、安城市について各市のホームページを使用して調べることにした。碧南市との比較をしやすくするために、調べる内容は、「プレミアム付食事券」と「水道基本料金の免除」の2つと、給食費の無償化などの子どもの生活とかかわりの深い政策だけとした。

10時間目は、各グループで調べた情報の共有を行うところからスタートした。児童Aは、安城市の発表になると、「プレミアム商品券をやっている」と調べたことを発言することができた。情報の共有後、「どこの市も同じような政策だけけど、違うところはあるかな」と問うと、プレミアム率や購入できる金額が違っていることに、児童Aを含め多くの児童が気づいた。そこで、「どうして市によって違うの」と問いかけた。すると、ある児童が「その市に住む人によって望むことが違うから」と発言をした。周りの児童は「なるほど」とつぶやきながら感心している様子であった。続いて、資料8を市ご

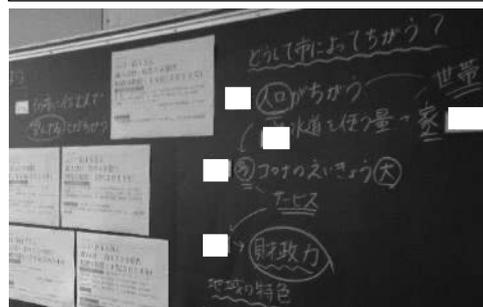
《刈谷市の政策》

人口：約15万人  
 歳入(出)：約940億円  
 財政力指数：3位(2014年)

刈谷市プレミアム商品券  
 ・1冊13,000円分を10,000円で販売(50,000冊)  
 ・期間：8/25～11/30まで ※使用した予算 6億5千万円  
 共通商品券→10,000円分 & 地元商店応援1商品券 3,000円分

水道料金免除 3(4)月～6(7)月の使用料  
 ・上下水道の基本使用料を4か月分免除する。4か月で6,400円の負担軽減。

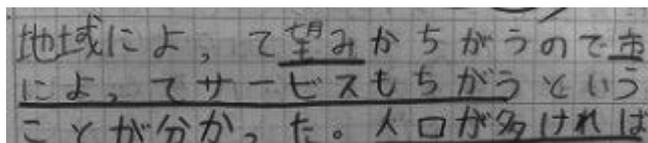
資料8 市の政策の内容をまとめた自作資料



資料9 資料掲後の児童の発表した意見の板書

とに揭示し、「人口による違い（世帯の数）」、「地域の特徴」、「財政力の違い」など、さまざまな違いを見つけることができていた（資料9）。

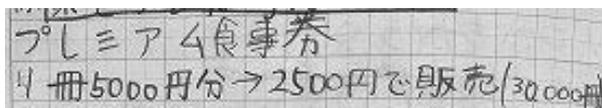
児童Aは、資料8を見た時に、市の人口や財政力の違いに着目し、「こんなに違うんだ」と驚きの声をあげていた。授業の振り返りでは、「地域によって望みが違うので、市によってサービスも違うことが分かった」と書いていた（資料10）。



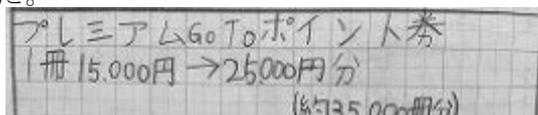
資料10 児童Aの振り返り

### (8) コロナ第3波が来た時の政策を考える児童A

単元のまとめとして、第3波に備えての政策案を考える活動を行った。考えやすいように、「プレミアム食事券」を真似して、どんな「プレミアム〇〇券」を作るかを考えることにした。個人で考えた後、意見やアイデアを出し合いながら、①どんな名前にするか（目的）、②発行部数はいくつにするか、③販売金額はいくらにするか（プレミアム率）の3点に絞って話し合いを行った。個人での作業では、全員が真剣に案を練り、自分なりに政策の内容を考えることができた。児童Aも、資料11のような設定で案を考え、話し合い活動ではしっかりと自分の意見を述べていた。同じ班の児童が高すぎる値段設定を提案した時には、「予算が決まっているからそんなに高くはできないよ」と、予算に着目した発言が見られた。児童Aの所属する8班の第1案は資料12の通りである。「ポイント制」を取り入れていて、幅広く使えるようにという思いが込められている内容であった。また、できるだけ多くの人に行き渡るように、碧南市の人口（約70,000人）の半分である35,000冊の販売にすると、具体的な理由をつけて発表することができていた。

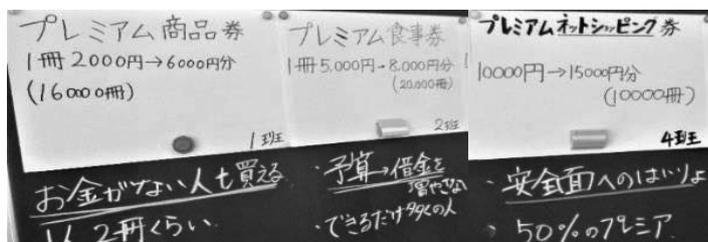


資料11 児童Aの案

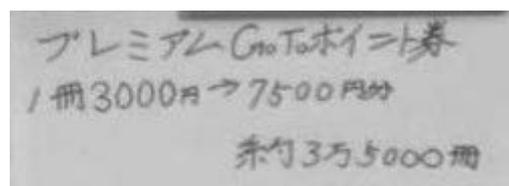


資料12 8班の第1案

その他の班の発表では、1班は、大人だけでなく、小学生でも買うことができるという理由からの値段(プレミアム率)の設定をした。2班は、市の予算について触れながら、プレミアム率を前回よりも下げた値段設定になっている。4班は、買い物をネットショッピング化し、感染拡大への配慮を取り入れた案となっている。いずれの案にも、予算、安全面、そして市の規模(人口)などを考えながらの内容設定がされていた（資料13）。11時間目では、第2案の検討を行った。児童Aの8班では、金額設定での話し合いが中心となっていた。予算の視点から案を練り直した結果、1冊の販売価格が15,000円から3,000円となり、市や幅広い世代の市民の立場にたって案を考えることができた（資料14）。



資料13 1、2、4班の第1案の板書



資料14 8班の案の変化

## 5 研究の成果と今後の課題

### (1) 研究の成果

単元の導入として、コロナによる自分たちの生活の変化を考えたことにより、コロナを自分たちの身近に感じることができ、その後の学習意欲の高まりにつなげることができた。ま

た、コロナに対する願いや問題点を考えたことで、政治の役割について知り、コロナと政治のつながりに気づくことができたと考える。国の政策である、「G o T o トラベル」に焦点を当てたことで、疑問をもったり、自分の考えをもったりすることができた。G o T o トラベルを利用するかどうかの意見交換会の場を設定したことは、多くの児童が自分の考えをもって授業に参加し、自分にはなかった考え方に触れ、自分の考えを深めることに有効であったと考える。市の行った政策について取り上げた際には、近隣の市との比較を行うことで、より多角的・多面的に市の政策をとらえることができていた。また、第3波に備えての政策案作りを行ったことで、児童全員が自分の考えをもって話し合いに参加でき、話し合いの活性化につながり、多様な考え方に多く触れる機会を作ることができたと考える。

## (2) 今後の課題

今回、身近な問題として「コロナ」を取り上げたことで、意欲的に調べ学習を行い、自分事として自分の考えを表現できる児童が増えたと感じた。友達の考えを聞く中で、自分の考えと比較し、自分の考えを深めていく児童の姿もたくさん見ることができた。しかし、コロナは身近な問題でありながら、政治の役割と結びつけて考えていくには、あまりにも大きすぎる社会的事象である。教員が情報を精選し、児童にとってわかりやすい問いを用意しておくなど、教員側の準備や工夫が必要であると実感した。これからも教材研究に精進し、子どもたち自身が課題に気づけるような教材や問いの工夫をしていきたいと思う。

## 【中学校第3学年における実践例】

主体的な追究活動と思考を可視化した対話によって考えを深め、  
社会に参画していこうとする生徒の育成

～3年公民『豊田市の外国人が安心して暮らせる街にするには?』の実践を通して～

### 1 主題設定の理由

豊田市では約19,000人の外国人が生活している。本校の学区にも500名弱の外国人が住んでおり、外国人の生徒も在籍している。以前に比べて、外国人との生活は身近なものであるが、言葉や宗教などの文化のちがいがから、お互いを十分に理解して共生しているとはいえないところもある。将来の日本や豊田市を見据えた時に、日本人と外国人、外国人同士のさまざまな違いを超えて、みんなが幸せに生活できる社会を模索し、創り上げていこうとすることが、今後よりいっそう重要になってくるはずである。

だからこそ、身の周りにある問題を見つけ、解決していくために、主体的に行動できる人材の育成が重要であると考えている。日本人や外国人の立場に立って考える多角的な見方や、ひとつのことをさまざまな視点から多面的にとらえる力、そして何より、地域社会に住む人として、社会にかかわり続けようとする意識を高めることが重要である。

以上のことから、次のようなめざす生徒像を設定した。

<めざす生徒像>

- ・主体的な追究活動と対話的な活動を通して多面的・多角的に考える生徒
- ・これからも社会に参画していこうとする生徒

### 2 研究の仮説と手だて

<仮説1>

地域社会に存在する切実な問題と出会うことで問題意識を高め、追究したことをもとに実社会に発信するような単元を構想すれば、生徒の社会参画の意識は高まるであろう。

【手だて1】豊田市における外国人向けの防災対策に関わる問題の教材化

【手だて2】外国人向けの防災対策についての改善策を、豊田市役所に提案する活動の設定

<仮説2>

対話的な活動をするときに、考えたことを可視化することで、自分の学びを振り返りながら学習をすすめる、生徒同士で多面的・多角的に考えを深めることができるであろう。

【手だて3】考えを可視化しながら行う対話的な活動

### 3 研究計画

(1) 単元構想 【中3公民 地方自治】

『豊田市の外国人が安心して暮らせる街にするには? ～市の外国人向けの防災対策を考えよう～』

段階	時数	学習活動
導入	1	(1)南海トラフ地震による被害状況を知る。
	2	(2)「災害弱者」にはどのような立場の人が含まれるのかを考える。 (3)巨大地震が起きたときに外国人が困ることを考えてKJ法でまとめ、共通点を明らかにする。 (4)外国人によるアンケート資料で、外国人が困ることを調べる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">豊田市に住む外国人が安心して生活できるように、豊田市ではどんな防災対策をしているのか?</div>
追究I	3	(1)市の外国人向けの防災対策を予想する。
	4	(2)調べ学習をすすめる。
	5	(3)外国人に対する、豊田市の防災対策は十分なのか話し合う。
	6	(4)市役所の方の話を聞いて、市のとりくみの現状を知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">多文化共生に向けた外国人向けの防災対策の政策を考えて、国際まちづくり推進課に提案しよう</div>

追究Ⅱ	7 8 9	(1)外国人向けの防災対策のアイデアを考え、付箋に書いて整理する。 (2)他グループにチェックしてもらい、問題点を改善する。 (3)考えた政策を提案するために、パソコンでプレゼンテーション資料を作成する。
まとめ	10	(1)国際まちづくり推進課の職員に、考えた政策を提案する。 (2)単元の振り返りをおこなう。

## (2) 抽出生徒

	実態	期待する姿
生徒A	誰とでもなかよく活動することができる。教員から示された学習課題に対して自分の考えをもち発表する。しかし、自ら問いをもち、調べる内容を決めて追究していく姿はあまりみられない。	自らの問題を持ち、主体的に追究活動を行いながら多面的・多角的に考えられるようになってほしい。また、地域社会に対して関わっていかうとする意識を高めてほしい。

## 4 研究の実際と考察

### (1) 豊田市にある驚きの事実との出会いを通して生徒の問題意識を高める【手だて1】

#### ① 南海トラフ地震がもたらす被害状況に驚く

日本では多くの地震が起きている。年表をもとに、東南海地震や三河地震の地震について確認し、南海トラフ地震の被害想定を取り上げた新聞記事を示した。そして、学区の被害状況を調べた。本校の学区は、豊田市で一番被害が大きいと想定されている。他の中学校区の被害想定と比較しながら、ある生徒が「前林が一番危険だ。」と声を上げた。その声を聞いた周りの生徒が驚きと心配の声をあげていた。生徒Aも「やばくない？」とつぶやいていた。その後、どのような立場の人が災害弱者になるのかを考えた。その中で、外国人という意見が出てきたので、「豊田市で巨大地震が起きたら、外国人はどんなことに困るのか」という課題を設定した。

この課題について、生徒Aは資料1のような考えを書いた。言葉の違いを原因とする、避難段階での困りごとと、避難した後の段階での困りごとを考えている。

**資料1** 豊田市で巨大地震が起きたら、外国人は言語の違いに困ると思う。例えば、避難勧告の放送が伝わらなかつたり、避難場所でコミュニケーションが取れなかつたりすると思う。だから、放送は日本語の後に、スペイン語や中国語でも放送する必要がある。

#### ② 切実感のある問題として、外国人向けの防災対策をとらえる生徒A

第2時では、巨大地震が起きた時に外国人が困ることについて予想し、豊田市の外国人意識調査などの資料をもとに調べていった。その中で「災害に対する備えの実施状況」と「備えをしていない理由」という資料を読み取り、中国やブラジルの人が備えていないのに、大丈夫とっている理由を考えた。生徒Aは地震の分布をふまえて「ブラジルでは地震がほとんど起きていないから恐ろしさや地震の知識がない。」と発言していた。

災害時に外国人が困ることを調べたり、地震の経験が少ない外国人について考えたりする活動をふまえて、生徒Aは資料2のような振り返りを書いた。資料2を見るとこのことから、生徒Aにとって、外国人向けの防災対策が、切実感のある問題になってきていることが分かる。

**資料2** 災害時に外国人は言葉の壁や文化の違いに困るということが分かった。生徒Eの「多国籍化がすすんでいるから、対応していく必要がある」という意見に納得しました。少し前の授業でもやった通り、多くの外国人がいるので、ほったらかしでは済まないと思うからです。

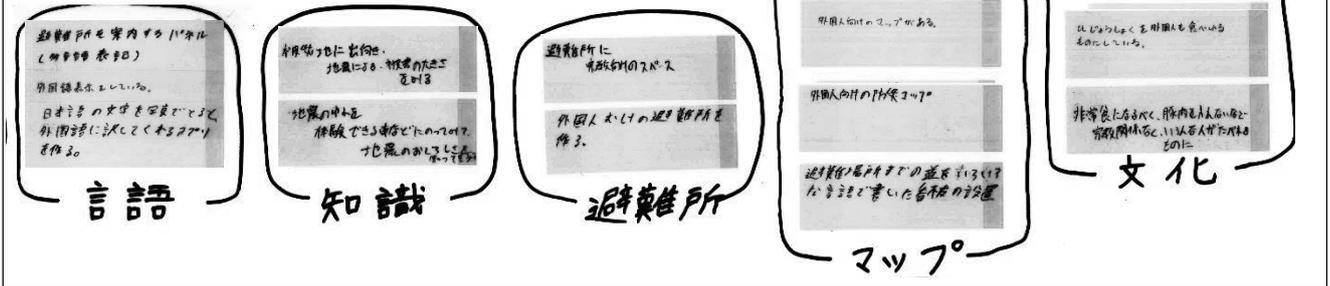
### (2) 生徒の問題意識に寄り添いながらすすめるさまざまな追究活動

#### ① 学習内容をもとに、豊田市による外国人向けの防災対策を予想する

豊田市が外国人向けの防災対策のとりくみとしてどのようなことを行っているのかを予想した。まずは個人で予想を考え、その後グループでKJ法を使って整理した。生徒Aが所属するグループが考えた予想は、資料3のようになった。多言語対応の看板やハザードマップ、地震の知識を高めるとりくみ、イスラム教などの宗教に応じた非常食の準備、外国人用の避難所の開設など、これまでの学習内容をふまえた予想が見られた。

資料3 第3時

「豊田市に住む外国人が安心して生活できるように、豊田市ではどんな防災対策をしているのか？」(予想)



② さまざまな調査活動の実施

KJ法でまとめた予想をもとに、避難所の看板の調査や市役所が作成した多言語のハザードマップ、有事に避難所や救護場所を示す多言語表示シート、災害サポートボランティアで通訳をする人が着用するビブスに関する調査活動を行った。ハザードマップを手にした生徒たちは、英語や中国語、スペイン語などの言葉を読み取りながら多言語のハザードマップだということに気づいた。また、多言語表示シートでは、教員が使い方を伝えた後、何か国語に対応しているのかを確認した。生徒たちは豊田市の国籍別の外国人の人口と関連させ、多く住んでいる外国人の国籍に言語が選定されていることを理解していった。

この時間、生徒Aは資料4のような振り返りを書いた。実物資料を通して、豊田市のとりくみについて「予想よりは対策ができていいる」と分かったものの、前時から予想していた宗教面でのとりくみについては、確かめることができていないことが分かる。下線部には、「宗教の問題は一つも対策をしていないのかな」という記述があり、生徒Aが宗教面でのとりくみに疑問を残し、問題意識を継続していることが分かる。

資料4 災害に備えて豊田市は外国人が困らないように対策をしている。例えば、事前に多言語のハザードマップや避難所看板を設置したり、有事には避難場所案内の多言語表示シートを設置したりしている。思ったよりも対策をしていると感じたけれど、宗教の問題は一つも対策をしていないのかなと思った。

その後、生徒Aはインターネットで「避難所での宗教などへの配慮」に焦点を当てて調べていた。そして、避難所運営マニュアルには礼拝する場所や食べ物への配慮があるという事実を見つけたことができた。

③ 「豊田市による外国人向けの防災対策は十分なのか？」という問いについて話し合う

現地調査や実物資料、インターネットによる調べ学習を終えた生徒の振り返りの中には、外国人に対する防災対策が十分であるという意見と、まだ不十分であるという意見が混在していた。そこで、一度全員で話し合う場面を設定した。

生徒Aは、授業の開始直後には資料5のように意見を書いていた。話し合いでは、多くの生徒が不十分な点があると考えていた。その理由として、宗教的な問題への対応、多言語の看板の数、地震に対する理解不足、翻訳ボランティアの数、ハザードマップだけあっても避難できない、といったことに関する意見が出た。

資料5 十分。言語面の対策だけでなく、避難所で困らないようにコミュニケーション支援ボードでコミュニケーションがとれて、避難所運営マニュアルに礼拝する場所や豚肉抜きのお食事を用意するように書かれていたので宗教的な対策もできていると思うからです。

話し合いを通して生徒Aは、資料6のように振り返った。「十分でない」生徒の考えを聞く中で、「やっぱりまだ不十分なのかな」と考えを揺さぶられる生徒Aの姿が分かる。「逆の立場になったときに」と書いてあることから、外国人の立場から考えると不十分な点もあるのではないかと考え出している。

**資料6** 私は十分できていると思っていたけど、みんなの意見を聞いてやっぱりまだ不十分なのかなと思いました。特に、逆の立場になったときに地図を渡されても分からないという意見にはとても納得できました。災害時はこっちも余裕がないというのも分かるけど、事前に対策できることはたくさんあると思います。

話し合いを通して、自分の考えを揺さぶられた生徒は、生徒A以外にも多く見られた。この疑問を解決するために豊田市はどのように感じているのかを確かめる方法を考える中で、生徒からは実際に市役所の人に聞きたいという意見が出てきた。

#### ④ 国際まちづくり推進課のIさんに豊田市のとりくみ状況を聞いて確かめよう

後日、豊田市役所（国際まちづくり推進課）のIさんを招いて、市のとりくみについて教えていただいた。その話の中で、ハザードマップが読めない、避難場所が分からないといった外国人が避難する前に困ることや、言葉が分からなくてコミュニケーションがとれない、宗教に関する入浴の問題といった避難した後で困ることを教えていただいた。それに加え、インターネットでは調べられないような実際の事例を教えていただいた。災害で落ち込んだ雰囲気をもくするのために、大きな音楽を流して踊り出した事例などである。生徒たちは事例の内容に驚きつつ関心をもって話を聞いていた。また、市のとりくみ状況として、Iさんから「豊田市としても、外国人向けの防災対策は改善の途中なので、前林中の生徒にも若者の視点で考えた政策のアイデアを提案してほしい」というお話をいただいた。

市役所のIさんの話を聞いたあとに、生徒Aは**資料7**のような振り返りを書いている。「想像していた以上に～」「日本人には遠慮という文化が～」といった言葉があるように、外国人に対する防災対策を考える時に、生徒Aの予想を超えた大変さがあることに気づいている。それぞれの国の文化や生活感覚をもっている外国人と日本人との文化のギャップがかなり大きいということである。また、「少しでも外国人の不安が減るようにする必要がある」など、外国人の立場に立って対策を考えていこうとする思いを見られる。

**資料7** 私たちが想像していた以上に、いろいろなことで困ってしまう外国人が多いんだなと思った。「ご自由にお持ちください。」と書いてあっても、私たち日本人には遠慮という文化があるので、一つか二つくらいしかもらわないけれど、外国ではあまりそういう考えがないということにびっくりしました。避難所で音楽を流して踊ってしまった人にしてもそうですが、地震の恐怖や不安などが招いていることなので、少しでも外国人の不安が減るようにする必要があると思いました。（後略）

### （3）思考を可視化しながら対話することで多面的・多角的に考える【手だて3】

#### ① 対話を通して、出し合った政策から3つのアイデアにしぼる

市役所のIさんから生徒に、政策のアイデアを提案してほしいという依頼を受けて、生徒たちは外国人向けの防災対策のアイデアを考え始めた。個人でアイデアを考えただ後に、似たような考えをもっている生徒同士でグループをつくって活動をすすめた。「外国人の活用」という視点で共通点があった生徒Aは生徒Bとの二人グループとなった。

まず、生徒Aと生徒Bはさまざまなアイデアを出し合い、三つにしぼっていった。グループで最終的に決まったアイデアは**資料8**の三つである。

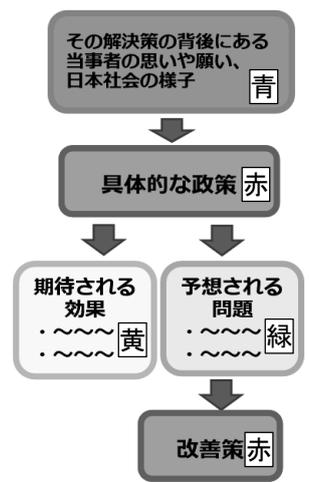
#### **資料8** 生徒AとBが考えた政策

- ① 災害を経験した外国人が講習会を開いて、自分の経験をふまえた対策を提案する。
- ② 避難所に、日本に長く住んでいたり日本語を話せる外国人を派遣する。
- ③ 市役所で外国人が働いて、災害対策の話し合いに参加してもらう。

#### ② 三つのアイデアについて、分析内容を付箋に書き出し、可視化しながら整理する

提案するプレゼンづくりをするために、三つのアイデアについて分析をしていった。分析をする際に、**資料9**のように色付きの付箋に書いた分析内容を整理して活動をすすめていくことにした。生徒AとBは、**資料10**のように情報を整理しながら、対話をすすめて、アイデアを分析し、改善点など出し合っていた。ちなみに**□□**は他グループから指摘を受けた問題点と、その改善点である。

資料9 付箋を使った政策のまとめ方



資料10 生徒Aのグループが考えたアイデアの分析



③ 思考を可視化した状態での対話を通してアイデアを発展させた生徒A

生徒Aと生徒Bは政策の問題点について考え、その改善策について話し合っていた。その結果、資料10の〔 〕で囲まれていない部分については、生徒Aと生徒Bで政策について分析をして問題点についての改善策を考えることで、政策をよりいっそう発展させることができた。資料11を見ると、生徒Aは「問題点やそれに対する解決策はお互いに話し合っ〜」「よりよい対策を考えることができた」と記述しており、生徒Bとの対話が効果的に行われたことが分かる。

資料11 生徒Aの振り返り

《生徒A》(前略)、問題点やそれに対する解決策はお互いに話し合っ〜たくさん意見を出すことができた。2人だけだけど生徒Bがすぐに意見を出してくれるので、よりよい対策を考えることができたと思う。

④ 他グループから指摘された問題点をもとに多面的に考えていく

各グループである程度できあがってきたら、他グループの政策を見て、問題点を付箋に書き貼り合う活動を行った。資料10の〔 〕で示された部分が他グループからの指摘があったところである。他グループからの指摘を見て、生徒Aと生徒Bは、指摘の内容を確認し、各政策について改善策を考えていった。指摘された内容を見てみると、費用や人手に関するものが多かった。つまり、生徒Aと生徒Bの考えでは、費用や人手の準備についてあまり触れられていなかった。しかし、指摘を受けて生徒Aは、〔 〕の①②③の部分については生徒Bと話し合い、自分たちの改善策をまとめることができた。例えば、「非常食の試食にはお金がかかる」という指摘については「賞味期限がないものを出す」とか、「市役所で外国人を働かせる」というアイデアに対する「災害についての専門的な知識があり、日本語が話せる人は少ないのでは？」という指摘については、「市役所で働く外国人に講習会を開く」など、生徒Aと生徒Bで問題のポイントをはっきりさせて話し合い、当初に比べて多面的な視点で改善策を考えることができた。

⑤ 付箋を使って思考を可視化しながら多面的・多角的にアイデアをまとめる

生徒Aは最終的に資料12のような提案内容にまとめた。外国人の立場で考えることはもちろん、③については「日本人の負担を減らす」とあるように日本人のことも考慮しながら考えていることが分かる。また、資料10の図をもとに、話し合ったことが筋道を立ててまとめられている。

## 資料 1 2 生徒 A のグループが考えた最終的な提案内容

	政策の内容	政策の背景 外国人の困りごとなど	政策の効果	予想される問題点と対応策
①	災害を経験した外国人が講習会を開いて、自身の経験をふまえた対策等を提案する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前の備え方や災害時に何をすべきか分からない。</li> <li>・地震の怖さが分からない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国人が地震の怖さを知ることができる。</li> <li>・適切な備えができる外国人が増える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地震を知らない人は話だけではピンとこない。 ⇒実際の映像や資料を提示する。</li> <li>・参加してくれる外国人が少ない。 ⇒広報で宣伝。非常食の試食など、行きたくなるような企画をする。</li> </ul>
②	避難所に、日本に長く住んでいる外国人を派遣する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・避難所で不安になったり、孤立してしまったりする。</li> <li>・指示がわからない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉が通じる人がいることで、外国人が安心できる。</li> <li>・指示がきちんと通ること、混乱を防げる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語は話せても、災害の専門用語がわからない人がいる。 ⇒事前に外国人向けに講習会を開いて、専門的な知識を身につけてもらう。難しい用語を簡単な日本語で説明できるようにしておく。</li> </ul>
③	市役所で外国人が働いて、災害対策の話し合いに参加してもらう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国人向けの対策がされていない。</li> <li>・外国人目線に立つことは難しいので、政策を考える日本人にも負担がかかる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国人目線の対策ができる。</li> <li>・日本人の負担が減る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本人に対して意見を言えるだけの日本語力と、災害経験、外国人の目線にたつことが必要なので、人手が足りない。 ⇒同じ言語を話せる人が集まって話し合い、その結果出た意見を、日本語を話せる人が通訳する。</li> </ul>

### (4) 生徒の社会参画の意識を高める提案活動【手だて 2】

単元の最後には、考えをプレゼン資料にまとめ、市役所の I さんに提案した。I さんからは、各グループの提案内容に対して講評をいただいた。生徒 A のグループの提案内容については、「市役所で働いている外国人が災害対策の話し合いに参加したことはないので、今後ぜひやっていきたい。」という内容であった。

I さんへの提案を終えた後に、生徒 A は資料 1 3 のように振り返った。「市役所のお仕事に興味がわかりました」「一市民として外国人向けの防災について考えていきたい」という言葉から、生徒 A の社会参画の意識が高まったことが分かる。

資料 1 3 (前略) 外国人の方に災害対策の話し合いに参加してもらったことはないそうなので、それが実現されて 1 人でも困ってしまう外国人が減るといいなと思います。今回の学習を通して、市役所のお仕事に興味がわかりました。私たちがアイデアを考えるのは簡単ですが、実際に実現するためには、予算や時間、人手などたくさん問題をクリアしなければいけないので大変だなと思いました。将来、直接、市の行政に関わることはなくても、一市民として外国人向けの防災について考えていきたいです。

## 5 研究の成果と今後の課題

### (1) 研究の成果

豊田市における外国人向けの防災対策に焦点を当てて教材化することで、生活経験をいかしながら問題意識を高めることができた。生徒の問題意識は「豊田市に住む外国人の数」「豊田市における外国人向けの防災対策」「市の対策は十分なのか」「自分たちのアイデアを提案しよう」という風に、問題を発展させていくことができた。

そして、単元のまとめ段階では、豊田市の外国人向けの防災対策がよりよくなるための改善策を、市役所に提案する場を設定した。提案するまでの準備段階に生徒どうしで意見を交わしながらアイデアを検討していく活動や、実際に提案する活動が、生徒の地域社会に対する意識を高め、今後も地域社会に関わっていこうとする思いを向上させた。

また、考えを付箋紙に書き、情報を整理する活動をすることで、生徒どうしで問題点がどこなのかを共有しやすくなり、効果的な対話活動を行うことができた。他グループからの指摘についても考えることができ、新たに考える視点を獲得することもできた。

### (2) 今後の課題

生徒の学びを深める手だてとして、思考を可視化しながら対話をする活動を実践した。今回は、付箋を貼り情報を整理することで、効果的に対話を行うことができた。学習課題に応じて、付箋の貼り方や使い方などを工夫して、情報整理の方法を考案していくことで、より効果のある対話が生まれる可能性がある。今後、工夫しながら実践していきたい。